

# Bird Research Annual Report 2025

---

バードリサーチ活動報告

---



NPO法人 バードリサーチ  
Japan Bird Research Association



## ごあいさつ

2025年も全国の会員の皆さまと共に野鳥の研究と保全に取り組むことができました。日頃のご参加、ご支援に心より感謝申し上げます。

日本では、公害や開発が社会問題となった1970年代から市民参加による野鳥の全国調査が積み重ねられてきました。全国鳥類繁殖分布調査、湖沼のガンカモ類、干潟のシギ・チドリ類、森林・草原の小鳥類など、バードリサーチが独自に、あるいは多様な協力者と共に実施してきた調査は、野鳥の生態や調査に関心を寄せる多くの方々の協力に支えられています。観察の積み重ねにより、国内の分布や個体数の変化が見えるようになり、その中には減少が懸念される野鳥も少なくありません。モニタリングの重要性は今後さらに高まっていくと思います。

バードリサーチでは鳥類の基礎的な調査をはじめとして設立以来掲げてきた四つの活動の柱を軸に、数多くのプロジェクトを実施してきました。それらの位置づけを整理し、目指す到達点を共有するために、今年「ミッション」と「中期目標」を立てました。この目標に向かって一つ一つの取り組みを確実に前進させていきたいと思っています。

取り組みの一つとして、日本の夏鳥が冬を過ごす東南アジアの越冬地を調べる国際協働プロジェクトをスタートさせています。渡り鳥の保全には夏鳥の越冬地を明らかにして、そこでの取り組みに繋げる必要があります。この活動報告でご紹介している2つのプロジェクトの対象地であるインドシナ半島やフィリピンでは、日本のような市民参加型の野鳥調査はまだ発展途上です。現地の研究者や市民と手を携え、渡りの両端を結ぶネットワークを築いていきたいと考えています。

目標の達成に向けて国内外での調査研究体制を充実させていきたいと思いますので、引き続きバードリサーチの活動にご参加、ご支援いただけますよう、お願い申し上げます。



シマセンニュウ (Photo: 藤井 薫)

**職員** 左から 植村慎吾、姜雅琚(ジャン ヤージュン)、高木憲太郎、神山和夫、藤原敦子、守屋年史

## Staff



**嘱託研究員** (五十音順)



井上 遠



植田陸之



大坂英樹



熊田那央



黒沢令子



シンバ・チャン



奴賀俊光



福田佳弘



藤田 薫



三上かつら



山崎優佑



ルリビタキ (Photo: 池永 祐二)



# NEWS & TOPICS

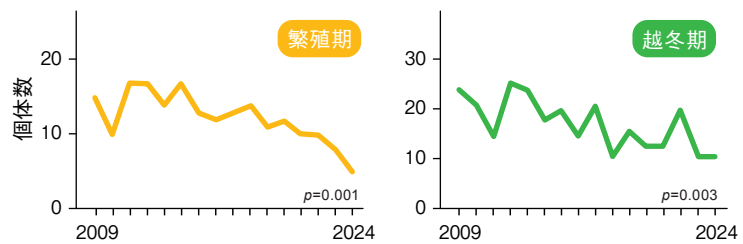
## 低標高サイトでのヒガラ減少、 ホントウアカヒゲの減少

【モニタリングサイト1000 陸生鳥類  
調査情報 Vol.16 No.2, Vol.17 No.1】

モニタリングサイト1000森林草原の陸生鳥類調査で、京都の上賀茂サイトではほぼ毎年記録されていたヒガラは、2022年以降の調査で3年連続で記録されていません。ヒガラは寒冷な森林を主な繁殖地としていて、全国鳥類繁殖分布調査では個体数も分布も標高の高い山地で拡大しています。一方で、上賀茂サイト(標高180m)はヒガラの分布の低標高側の端にあたります。このような標高が低い場所では、ヒガラの個体数や分布が減少してきているのかもしれませんが。

沖縄の与那サイトでは、ホントウアカヒゲが減少してきていることがわかりました。ホントウアカヒゲはマングース対策の効果があって、繁殖分布域を広げていると考えられています。しかし、モニタリング

サイト1000の記録では2014、15年ごろから緩やかに減少が続いています。捕食者として考えられるハシブトガラスは、2013年ごろから多い状態が続いていました。2012年に大型台風で植生が大きな影響を受けており、林内に空間が開いたことでハシブトガラスが侵入しやすい環境になって、その影響を受けているのかもしれませんが。沖縄島でデータをとっている研究者とも連携して、減少の要因を探ろうと思います。



▲ホントウアカヒゲの個体数変化



ヒガラ  
(Photo: 数野 千恵)

## 十勝平野の雁ねぐらをドローンで調査 【BRNews 2025年11月:1】

北海道の十勝平野は秋と春にガン類の多くが中継地として利用する場所ですが、十勝平野ではガン類のねぐらがあまり見つけていませんでした。そこで、2025年の秋にねぐらの可能性がある場所でドローンを使った調査を行いました。調査地のひとつである三日月沼は、これまでどのくらいのガンがねぐら入りしているのかが分かっていませんでしたが、空撮した写真には多数のシジュウカラガンとハクガンが写っていました。撮影した写真をAIソフトウェア

で自動カウントをしてみると、約9,000羽のシジュウカラガンと約2,000羽のハクガンががねぐらに使用していることがわかりました。十勝川流域は人が近づくことが難しい沼沢が多いので、これまでの目視調査を続けながら、ドローンによる探索も行っていく予定です。



▲空から撮影した三日月沼  
(Photo: 吉田 水十華)



▲空撮写真に写ったシジュウカラガンとハクガン



ハクガン、ヒシクイ、シジュウカラガン (Photo: 城石 一徹)

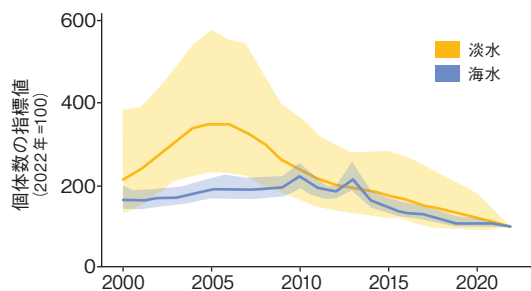
アオアシシギ  
(Photo: 湯浅 芳彦)

## シギ・チドリ類のとりまとめ報告書と現状

【BRNews 2025年10月:1】

モニタリングサイト1000事業の『シギ・チドリ類調査 2004～2022年度 とりまとめ報告書』が、環境省生物多様性センターから発行されました。シギ・チドリ類調査事務局としてバードリサーチは、この報告書に主体的に取り組みました。シギ・チドリ類のとりまとめは、全国累計163サイトで春・秋・冬の長期調査を継続し、2004～2022年の個体数変動と生息状況を整理しました。種別の動向では、オオソリハシシギ等9種が全季節で減少、どこかの季節で減少を含む種は29種。ピーク時より淡水湿地に生息する種は春に約1/4に、干潟に生息する種は全季節で約1/2、砂浜に生息する種も約1/3に低下しています。一方、ミヤコドリのみが全季節

で増加していました。地域別では、東京湾・伊勢三河湾、北海道～東海地域で減少サイトが多く、有明海の大塚掘のみ全季節で増加傾向にありました。シギ・チドリ類の脅威は、1960・70年代の大規模埋立てなどの開発による生息地の減少から、水田などの湿地機能低下、砂浜減少、国内外の中継地の劣化、気候変動などが重なる複合的な要因になっていると考えられます。フライウェイ全体での保全とモニタリング強化が急務となっています。

▲淡水・海水の環境選好別による個体数指標の変化  
(2022年を基準とする指標値)

## 季節前線ウォッチ

### 「北上」を実感しやすいオオルリ・しにくいカッコウ

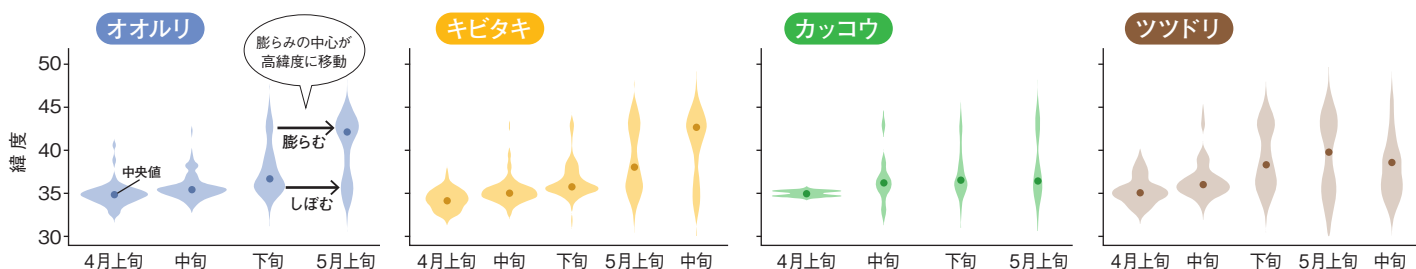
【BRNews 2025年8月:2】

春の「季節前線ウォッチ」では、全国の参加者から寄せられた観察データをもとに、夏鳥の初鳴きや初認時期と分布の変化を解析しました。今回は2021～2025年の5年間の記録を用いて渡り鳥の北上のようすを、緯度と報告件数を同時に可視化しています。

結果では、オオルリとキビタキで、春の進行に伴い初認の報告数が多い地域が南から北へ移動するようすが確認されました。4月上旬は中部～関東(北緯35～38度)で報告が多く、5月上旬には北海道北部(北緯45度付近)に報告の多い地域が移っており、時期とともに北上していることがわかります。一方、

カッコウやツツドリでは、渡来初期から図が横方向ではなく縦方向に一気に伸びる形を示し、短期間で全国的に渡来する傾向が見られました。中央値の緯度も期間を通してほとんど変化せず、季節が変化しても報告が特定の地域に偏らない傾向が見られました。

このように、同じ夏鳥でも、種によって渡りの進行速度や報告地域の広がり方の特徴が異なります。季節前線ウォッチの観察記録は、鳥類が春の環境変化にどのように対応しているかを示す貴重なデータとなっています。引き続きご参加・ご協力をお願いします。

オオルリ  
(Photo: 渡辺 修自)

▲直近5年間の初認・初鳴き情報報告数の緯度分布図

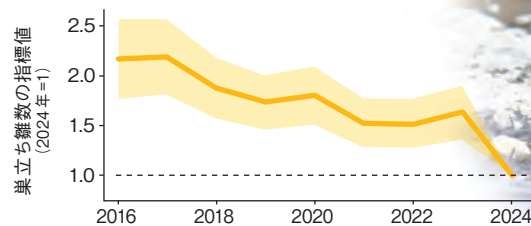


# オオタカの繁殖状況モニタリング

【BRNews 2025年9月:1】

2016～2024年の全国アンケートによるオオタカ繁殖状況の分析を行いました。これまでに累計1227件の営巣情報をいただき、2024年は137巣について報告をいただきました。繁殖成功率は近年横ばいでしたが、2024年に60%を下回り急落しました。ヒナが巣立たなかった巣は、2016年以降で最も多くを占める結果となり、巣立ちが成功した巣でも平均巣立ち数は1.84羽で過去平均1.97羽を下回りました。情報が多い関東や中部でも低下傾向が目立っています。場所の効果を考慮した分析でも、巣立ちヒナ数の指標値は、2016年以降は低下傾向で2024年に大きく低下していました。低下の要因として、

生息地劣化(ナラ枯れ対策や開発による伐採)、鳥インフル、外来種による巣内捕食などが示唆され、今後は市民調査に専門家調査を加え、要因解明と順応的な管理を急ぐ必要があります。オオタカは里山のアンブレラ種であり、継続的な監視と協力が求められます。



▲TRIM解析を用いたオオタカの巣立ち雛数の指標値の動向 (2024年を1とする)



オオタカ  
(Photo: ZHIBO)

## FSC認証林の鳥にとっての価値を調べる

WWFジャパンと協力して、岐阜県東白川村のヒノキの植林が主体のFSC認証林の価値を評価するため、岐阜県や隣接県の会員の方に参加していただき、2025年5-6月に鳥類の調査を実施しました。FSC認証とは、持続可能な生産林についての国際認証です。FSC認証林の中にもヒノキやスギの針葉樹林だけでなく、広葉樹の入った針広混交林などがあり、低木やササの有無など、環境の異なる林がありました。そこで、こうした環境の違いをもとに森林を分類し、4つの異なる環境に4地点の調査地を設け、モニタリングサイト1000の森林で実施しているスポット

センサスと同じ方法で調査しました。

その結果、林内に低木のある林では、低木層の茂ったところに巣を造るクロツグミなどの鳥が、林床にササのある林では、藪の中に巣を造るウグイスなどの鳥が多く記録されました。

また、得られたデータの一部を使って、比較的地理的に近く、標高も同じ富士山の南側の山麓に広がる植林で調査した時のデータと比較すると、東白川村のFSC認証林の植林では、オオルリやアカショウビンなどの成熟林を好む鳥や、キビタキやヤマガラなどの

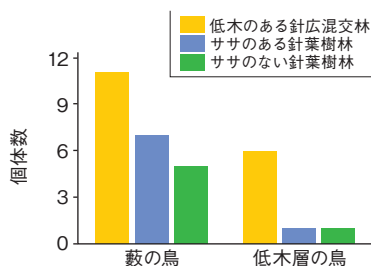
広葉樹二次林を好む鳥が多い傾向がみられました。画一的な管理ではなく、小さめの林班ごとに丁寧に管理されており、広葉樹の入った環境保全林なども確保されていることがこうした鳥の多さを支えているのではないかと思います。



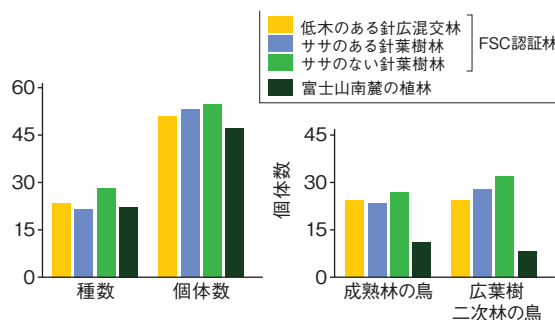
アカショウビン  
(Photo: 中山 厚志)



キビタキ  
(Photo: 野間 修一)



▲低木やササの存在がそうした環境を好む鳥の生息を許容していた。林床の管理次第で鳥の生息環境としての林の価値は変化する。



▲東白川村のFSC認証林と富士山南麓の植林との比較

# バードリサーチ調査研究支援プロジェクト —投票の結果と上位2件の紹介

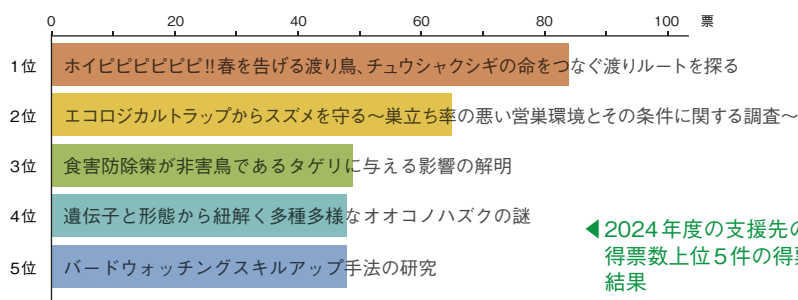
【BRNews 2025年4月:2】

みなさまから寄付を募って、それをもとに鳥類の調査や研究を行う会員の方に支援しました。2024年度の支援の総額は約176万円。これらを得票数で割り振り、9件の支援先に贈呈しました。得票数の最も多かった調査研究プランは細谷淳さん、田谷昌仁さん、井上遠さん、仲村昇さんによる調査研究プラン「ホイビビビビビ!!春を告げる渡り鳥、チュウシャクシギの命をつなぐ渡りルートを探る」でした。2位は岡村悠太郎さんと橋本啓史さんによる「エコロジカルトラップからスズメを守る～巣立ち率の悪い営巣環境とその条件に関する調査～」でした。

得票数1位の細谷さんたちによる調査研究プランは、個体数の減少が指摘されているチュウシャクシギを対象にGPSロガーによる追跡調査をするというものでした。中継地の日本でどのように環境を選んで過ごし

ているのか、繁殖地や越冬地がどこなのか明らかにできれば、保全への道筋も見えてくるのではないかと思います。

得票数2位の岡村さんと橋本さんによる調査研究プランは、電柱の腕金など人工構造物の隙間に営巣するスズメの繁殖成績を調査する内容です。太陽光にさらされる腕金などの内部は相当な温度にまで上昇しているため、そこでは繁殖成績が悪いのではないかと考え、孵化したヒナのうち巣立つことができたヒナの数と巣内温度の関係を明らかにしようとしています。



チュウシャクシギ  
(Photo: 数野 千恵)

## バードリサーチ大会を開催 —東南アジアでの夏鳥生息地解明と環境保全—

コロナ禍のときから中止していた対面でのバードリサーチ大会を、5年ぶりに東京で開催しました。今大会では夏鳥の渡りルートと越冬地をテーマにして、渡り鳥にジオロケーターやGPSデータロガーを装着して追跡している研究者の皆さんに講演をしていただきました。越冬地が明らかになる一方で、その生息環境をどのように守っていけるかも考えなければなりません。この課題について、バードリサーチからタイ、カンボジア、ミャンマーで行っているシマアオジの越冬地調査、そしてフィリピンのルソン島にある森林コーヒー農園での夏鳥の越冬調査について発表しました。大会会場ではルソン島の調査地で生産された「渡り鳥が冬を過ごす

森のコーヒー」を参加者の皆さんにサービスして、日本での初売りも行いました。このコーヒーを購入して農家の収入を増やすことが、越冬地の森林保護につながります。購入方法はコーヒープロジェクトのWebサイトをご覧ください。



▲バードリサーチ大会

<https://coffee.bird-research.jp/>



▲渡り鳥が冬を過ごす森のコーヒー



## 野鳥データベース 「バードノート」に新機能

観察した野鳥の記録をデータベース化するバードノート(フィールドノートから改名)に、種名検索と初認記録の検索画面を追加しました。種名リストも日本鳥類目録改訂第8版の順に並ぶようになりました。1月と5月には、バードノートを使ってリアルタイムに記録種数を競争するインターネット・バードソンを開催しています。

## 絶滅危惧種シマアオジの国際協力による 越冬ねぐら調査

【BRNews 2025年6月:2, 2025年9月:2】

バードリサーチでは地球環境基金と経団連自然保護基金の助成を受けて、絶滅危惧種シマアオジが越冬するインドシナ地域での国際協力の枠組み作りと、越冬ねぐら調査の立ち上げを行ってきました。今年も現地の自然保護団体や野鳥関係者と協力して調査手法や保全対策を検討するワークショップを行うとともに、2025年度越冬期にタイ、ミャンマー、カンボジアの越冬ねぐらの調査

を実施しました。

さらに2026年の2-3月に対象地域を増やして越冬ねぐら調査をするためにクラウドファンディングによる寄付を募り、多くのご支援が得られたため調査実施の目処が立ちました。この成果を保全につなげていきたいと思います。

2024-2025年冬の調査でわかった  
シマアオジのねぐら ▶



## バードリサーチのミッションと中期目標

バードリサーチは設立以来、鳥の調査に関わる活動を多岐にわたって実施してきました。この活動を継続、発展していくため、10年先に実現したい中期目標と、バードリサーチの使命(ミッション)を表す言葉を作りました。この目標を達成するため、会員の皆さんが参加できる活動を増やし、野鳥調査のトレーニングや、見やすいWebサイトでの情報提供、資金源の多様化などに取り組んでいく予定です。今後もバードリサーチの活動へのご参加、ご支援をお願いします。

### バードリサーチのミッション

バードリサーチは、鳥や自然を知りたい調べたいと思う多くの人々や団体と共に調査し、収集した情報を蓄積・解析して、新しい知見を広く社会に伝えます。

### 2034年までに実現を目指す中期目標

1

全国鳥類繁殖分布調査  
2036-2040

第4回目となる全国鳥類繁殖分布調査では、バードリサーチが中心となって実施できるよう、より多くの会員に調査に参加してもらえるようにする。

2

ビッグデータの整備

分布・個体数データ、食性データ、音源データなど鳥の調査や生態に関わるデータを収集・評価・提供する体制を整える。

# みんなで進める 調査・研究

バードリサーチでは、野鳥の観察、調査、研究のための様々な取り組みを行っています。

調査や研究の成果を発表し交流する場として2020年から5回目の開催となった『バードリサーチ鳥類学大会』には379名が参加し、活発な情報交換が行われました。野鳥観察の記録をまとめたり、その記録が『季節前線ウォッチ』や様々な場面での分布情報として活用される『バードノート』の年間利用者数は640名でした。また、年始やゴールデンウィークなどには、バードノートを利用した『インターネット・バードソン』も企画していますので、ぜひご参加ください。そのほかに、『さえずり検索』や『TORIクイズ』など、鳴き声や画像による識別学習の支援やYouTubeなどを利用した発信なども行い、今後も野鳥に関する調査・研究の支援を行っていきます。

2024年度、バードリサーチでは、489名から3,868,503円の寄付をいただきました。寄付は、研究支援やツバメ・シロチドリ の保全活動などに活用しています。また、会費による継続的なご支援も783名からいただきました。会費は経年的な調査や団体運営などの大きな力になっています。会費によるご支援を毎年募集していますので、引き続きご検討のほどよろしくお願いいたします。

資金面その他、調査活動にも多くの皆さんが参加してくださいました。全国の方から寄せられた報告をまとめ、野鳥の生態や国内の自然環境に関する情報を発信していきたいと考えています。

ご協力いただいた皆さまに改めて御礼申し上げます。引き続き、よろしくお願いいたします。



TORI Quizは  
こちらからどうぞ↓



表紙写真：ホオアカ (Photo: 黒木 奈津子)

特定非営利活動法人 バードリサーチ

〒186-0002 東京都国立市東 1-4-28 篠崎ビル 302

E-mail: br@bird-research.jp

http://www.bird-research.jp

デザイン：いきものパレット



ミックス  
責任ある木質資源を  
使用した紙  
FSC® C114747